

とが肝要であります。学会内外の要請に迅速・適切に対処し、必要に応じて指導力を発揮すべく柔軟かつ強力な運営ができるよう学会の組織・体制を見直し改善に努めています。

上記の4課題はそれらに対処すべき具体的施策や力点の置き所は時代と共に変わっても課題そのものに大

きな差異は生じないでしょう。

本年、新しい役員選挙制度のもとで選出される次期執行部にも、気象学・大気科学の新たな飛躍をめざして、会員の皆様のより一層のご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

日本気象学会1993年度秋季大会の報告

日本気象学会1993年度秋季大会は、1993年10月26～28日に宮城県民会館と仙台市民会館で行われた。参加者数は488名(このうち予約参加者は224名)であった。

1日目午後には、山本正野論文賞・堀内基金奨励賞等の授与式に続き、大会シンポジウム「大気・陸面過程と衛星リモートセンシング」が行われた。

大会前日(25日)には、海洋学会との共催により、大気海洋相互作用に関する国際シンポジウムがイズミティ21で開かれた。また、これに関連した「TOGA-COARE」をテーマとしたスペシャル・セッションが26日に行われた。この他、個別のテーマによる研究会が会期中および大会翌日(29日)に計4件開かれた。

発表申込件数は315件(ただしキャンセルが数件)で、春季大会に続いて300件を超えた。その内訳は第1種講演が233、第2種講演が59、ポスターが23件であった。第2種講演として申込まれた講演のうち、予稿の書き方が第2種の要件を満たさない等の理由でプログラム編成時に第1種に変更されたものが11件(前回は14件)あった。

今大会事務局として大会準備・運営にご尽力頂いた仙台管区気象台と東北大学の皆様に深く感謝の意を表します。

1993年12月 講演企画委員会